

心を一つに校歌斉唱



コロナ禍がようやく落ち着きを取り戻すと、校内では、歌を中心とする活動が再開されました。これまでは、心の中で音にならない言葉を紡いでいくしかありませんでしたが、全校生徒で校歌を斉唱する機会が増えると、あらためて人前で歌う喜びを感じずにはいられません。

さて、「校歌」と言えば、どうしてもスポーツを連想してしまいます。特に、全国高校野球選手権大会、いわゆる夏の甲子園大会での試合終了後、勝者を称える場面を直ぐに思い浮かべます。選手だけでなく、スタンドで応援する仲間たちもが大きな声で歌う姿は、全身から溢れんばかりの母校愛や学校の誇りを感じます。笑顔いっぱいの球児たちが大きな声で熱唱する姿は、テレビの画面を通してでも、爽やかさと感動を与えてくれます。ちなみに、甲子園球場での校歌斉唱は、1929年の第6回大会からです。前年度に開催されたアムステルダムオリンピックで陸上女子800メートル銀メダリストの人見絹枝さんがオリンピックの表彰式で優勝した選手の国歌が流れたことにとっても感動し、帰国後、高校野球の大会関係者に提案したことがきっかけとされています。

私も小学校から大学まで、学校生活を通して身に付けた校歌のリズムが染みついており、今でも口ずさむことができます。特に中学卒業の時は、歌詞に過去の出来事を想起させるような言葉が多く含まれていることに気が付くと、学校生活の思い出が頭の中を走馬灯のように駆け巡り、歌いながら人目を憚らず号泣したのを思い出します。

私はこの機会に、本校校歌の歴史を紐解いてみることにしました。すると、意外なことが分かりました。制定されたのが創立後、既に40年が経過した昭和3年であること、また、昭和天皇即位の大礼を祝う意味が込められていること、さらには、2番の歌詞の一部が、当局によって訂正されていたことなど、歌の完成には、思い通りに物事が進まず、あらゆる艱難辛苦にも耐えなければならなかったことが窺えました。

いずれにせよ、歌詞や2拍子の曲調も、建学の精神だけではなく、大東京や新日本の言葉の通り、学校創立の時代背景を色濃く映し出されたものです。しかし、それはどのような時代になろうとも、日本人のアイデンティティをもって、新しい日本の国づくりに努力する若者の育成を願うことであり、作詞、作曲を手掛けた人たちの学校教育への普遍的な使命感を込めたものとなっているはずです。

令和6年の一学期を振り返ると、合唱部による始業式や入学式での校歌披露を皮切りに、部活動の試合でも声高らかに校歌を歌う応援も加わりました。サッカー部の関東大会や野球部の夏の甲子園予選会では応援スタンドに集まった大勢の生徒による校歌熱唱を3年振りに実現しました。

歌詞の如く、♪夢は遠くとも、努力を惜みず自らを駒（仔馬）と例え、鞭を打ち、前へ進め！と歌う生徒の姿を見て、同じ時間と空間の中で一つの楽曲を共有することで生まれる一体感が、学びの匂いとなって私の心を震わせました。

私は、本校生徒が誇りです。なぜなら、生徒一人一人がいかなる苦境にあっても大成高校への思いを馳せて青春を謳歌しているからです。その名に恥じない母校愛は、これからも校歌と共に何十年、何百年と受け継がれていくと信じています。

